

子の養育者への自己開示と養育者の要因について

—養育者への信頼性との関連—

博士前期課程 2回生 松田 万祐理

要約

子どもの養育者への自己開示の重要性が考えられる中、子どもを調査対象にした自己開示研究は十分にされてきていない。本研究では、養育者の養育態度と子の養育者への自己開示との関係を調査するとともに、自分の心の内を他者に明かすためには、相手に対する信頼が必要であると考え、養育者への信頼性との因果関係を検討することを目的とした。小学生を対象に調査を行った結果、養育者の中でも母親がより子どもに親密な態度で接していると子どもが認知していることが、子の母親への自己開示を促進するということが明らかになった。信頼性との関連については、母親の親密な養育態度が母親への信頼性に影響し、信頼性は子どもの、特に否定場面の自己開示を抑制するという結果となった。信頼性と自己開示の関係については、他の要因の関わりも予想され、さらなる検討の必要性が考えられた。

キーワード：自己開示、養育態度、信頼性

問題と目的

1. “自己開示”について

自己開示という語は、Jourardによって初めて心理学用語として用いられ、“個人的な情報を他者に知らせる行為”と定義されている(Jourard, 1971a)。Jourardは、日常生活における自己開示の重要性に着目し、「自己開示はパーソナリティ健康のしるしであり、健康なパーソナリティを至高に達成する手段である」(Jourard, 1971b)と述べており、自己開示の重要性を主張した。Cozby (1973)は、自己開示と精神健康との関係が直線的と言うよりも、曲線的であるという仮説を立てており、自己開示度が中程度の人のほうが、自己開示度が高い人、低い人よりも精神健康度が高いとした。日本における自己開示と精神健康の関連については、松井(1985)は、青年期を対象に研究しており、自己開示と精神健康は直線的関係になく、

女子は精神的健康のポジティブ面とネガティブ面の両面で曲線的関係があることを見出している。男子においては、ネガティブ面は関係が無く、ポジティブ面は女子と逆の曲線的関係傾向があることを示唆している。さらに、自己開示を促進する要因については、文化や環境、開示者の性格特性などについての研究がある(榎本, 1989; 田中・梅本, 2013など)。

2. 自己開示と発達段階について

自己開示研究は、主に青年を対象に行われてきており、自立に向けて両親との間に距離を置く青年期では両親から友人へと自己開示の対象が変化していくことが言われている(Jourard, 1961; Rivenbark, 1971)。Rivenbark (1971)によると、小学生以下の子どもの自己開示度は母親、父親、同姓の友人、異性の友人の順で高く、特にその傾向は女兒に強く見られる。小学

生においては自己開示の主な対象は両親であるといえる。中学生頃からその傾向に変化がみられ、母親や父親への自己開示度より友人への自己開示度が高くなる傾向がみられている。Jourard (1961b) は、17歳から55歳までの者を7つの年齢段階に分け、自己開示傾向を比較している。それによると、年齢の上昇とともに異性の友人（または配偶者）に対する自己開示度が増し、反対に、母親、父親、同姓の友人に対する自己開示度は低下する、としている。つまり、幼い時期は両親が一番の自己開示対象であるが、成長していくにつれて両親から同性の友人、そして同性の友人から異性の友人、配偶者へと開示対象が移行していくと考えられる。

自己の内面や、他者との関係の中での問題に目を向ける青年期は、自己開示研究において非常に重要であるといえるが、それ以前の発達段階においても重要だと考えられる。小口(1991)の研究では、子どもの養育者への自己開示が子どもの学級集団への適応にも関わることが見出されているが、子どもにとって自己開示の主な対象は両親であることが分かっているため、このことは養育者への自己開示の重要性を示唆していると言える。しかし、これまでの自己開示研究では子どもを対象にした研究が極めて少なく、子どもの自己開示の重要性が考えられるものの、子どもが自己開示をするに至る要因については十分に検討されてきていない。

3. 自己開示と養育態度、養育者への信頼性について

子どもの自己開示に影響する要因の一つとして、親の養育態度の影響が考えられる。自己開示と親の養育態度の関連については青年期を調査対象にしたものが多くみられる。Pederen・Higbee (1967) は両親に対する自己開示度は被験者による、両親の身近な、親切的な、受容的なといった評価と正の相関があるということを見出している。また、桜井 (1986) は、父親、母親に対して、精神的関わりがポジティブであればあるほど自己開示度が高いことを示してい

る。しかし、受容的な親の態度が、子の親への自己開示を促進すると考えられる一方、親の子を受け入れない養育態度が自己開示性を高めるという研究（榎本・林, 1983; 小口, 1991など）もみられ、一貫した結果が得られていない。

これまでの養育態度と自己開示の関連を調べた研究では青年期を対象にしたものが多いが、養育態度と養育者への自己開示との関連を調べるには、より自己開示対象として養育者の役割が大きい児童期以前の子どもを調査対象とすることが必要だと考えられる。池之上・藤崎(1995)は小学生を対象に研究を行い、自己開示に関係する親の態度として、“共感性”を挙げ、母親を受容的であると認知していると、母親をより共感的であるとみなし、自己開示に影響を与えているとしている。また、自分の心の内を他者に明かすためには、相手に対する信頼感が必要であると考えられる。久世・影山 (1974) は、青年を対象に両親への信頼性と困った場面における自己開示との関連を研究しており、父親または母親への信頼性の高い青年は、信頼感が低い青年よりも自己開示をするということを見出している。しかしその中では、信頼感は困った場面において父母や親友、先生などの中で誰を一番頼るか順位をつける形で検討されており、直接両親への信頼感を調査したものではない。養育者の養育態度と子の養育者への信頼性は、子の自己開示とどのような関連があるのか、子どもを調査対象として検討する必要があるだろう。

4. 本研究の目的

これまで、子どもを対象にした自己開示の研究が十分でないことから、本研究では小学生を対象にした研究を行う。中でも本研究では、自己や他者を客観的に把握できる下限年齢として小学校5年生の児童を対象にすることとする。自己開示に関わると考えられる要因としては、養育者の養育態度と養育者の共感性、そして子の養育者への信頼感が関係すると考え、自己開示との関連を調べる。その検証に当たって、子どもを受け入れる親の「受容的な養育態度」や

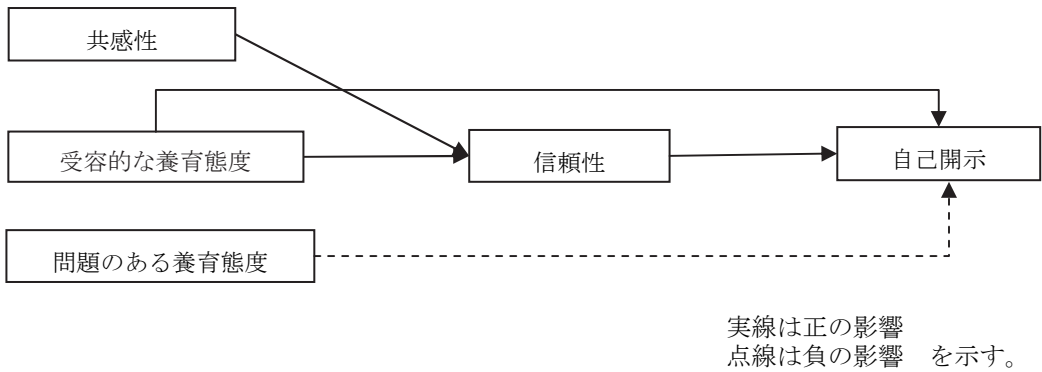


Figure 1. 仮説モデル

養育者の「共感的な対応」が養育者への「信頼性」を高め、「信頼性」が養育者への「自己開示」を高めるとする仮定を、これまでの研究をふまえて考えた。養育態度と共感性については、養育者自身の考えよりも、子が実際に日常でどのように認知しているかを重要と考え、子の認知に基づいてそれぞれの要因がどのように影響しているのかを調査したい。

以上の目的のため、具体的には次のような仮説を立て検証する。なお仮説に基づいたモデルをFigure 1に示す。

仮説1：養育者が受容的であるという認知は自己開示を促進し、問題のある養育態度の認知は自己開示を抑制する。

仮説2：養育者が受容的、共感的であるという認知は、養育者への信頼性を高め、信頼性が高いほど養育者への自己開示度は高い。

方法

1. 調査方法

1-1. 調査対象

A市立B、C小学校5年生173名。1クラス30人前後。

1-2. 調査方法

質問紙法を用いた。所要時間20分程度。

1-3. 調査実施日

2014年10月下旬～11月初旬

1-4. 手続き

学校長に承諾を得て、学級ごとに授業時間内

に集団実施した。本研究では、一人親家庭の児童も少なくないことを考慮し、児童に家族の誰について回答するかを自由に記述してもらう形をとった。

2. 調査内容

2-1. フェイス項目

回答者の性別と「あなたのおうちで、一番あなたといっしょにすごしている大人はだれですか?」という質問に答えてもらい、その後の質問項目には記入した人物について答えるよう指示した。

2-2. 自己開示尺度

Jourard (1971) が作成した自己開示尺度 (JSDQ) を子どもにとって理解しやすいよう、子どもの身近に起こりやすい場面に変更した、小口 (1991) の自己開示尺度を用いた。内容は、通学途中の出来事、勉強、友人、好きな異性の友人、身体、性格、小遣い、についての7種類について、それぞれ否定的場面と肯定的場面の2問ずつ設定している。全14項目について、フェイスシートにて記入した大人にどのくらい話しかを、「1. よく話す」「2. 少し話す」「3. 話さない」の中から選択を求めた。

2-3. 養育態度尺度

①養育者の受容的な態度尺度

鈴木ら (1985)、池ノ内ら (1995) の養育態度質問紙より、「受容的関わり」因子の第1主成分負荷量の高いもの5項目を抽出し、小学生

が答えやすいよう加筆・修正したものをを用いた。回答は「そのとおり」「まあまあ」「ちがう」の3件法で求めた。

②問題のある養育者の養育態度尺度

「田研式・親子診断テスト（児童生徒用）」（品川・品川，1958）の第一部より，「過保護・期待」因子と「拒否・厳格」因子に関わるとされる（小口，1991）項目から8項目を抜粋した。回答は「そのとおり」「まあまあ」「ちがう」3件法で求めた。

③養育者の共感的対応の認知尺度

角田（1993a）は小学生が感情体験をする「悲しみ」や「好意」などの場面について，母親の言葉がけを記述させる被共感イメージ課題を作成した。松澤（2011）はそれに加え，不安や退屈，好意など10の場面について検討している。本研究では，「期待」「悲しみ」「好意」「退屈」「怒り」の5つの場面を取り上げた。より子どもが答えやすいよう場面ごとに大人に自分の気持ちを訴えかける台詞を示し，それに対してフェイスシートで記入した大人がどのように答えるかを，受容，中立，拒否，それぞれを表した3つの台詞の選択肢から一番近いものを選択してもらった。

2-4. 養育者への信頼性尺度

酒井ら（2002）が作成した，酒井（2001a）の青年期の愛着関係における信頼感を測定する尺度を子ども用に改変したものから4項目を用いた。回答は「そのとおり」「まあまあ」「ちがう」3件法で求めた。

3. 結果

本研究では，質問紙で養育者の誰について回答するかを，自由記述で記入してもらった。その結果，母親について答えた児童が127名と，母親について答えたものが圧倒的に多かった。小学生児童にとって母親が重要な他者であることが想定されるため，本研究では養育者の中でも特に母親について検討することとする。母親について回答した127名のうち，11名は回答に不備があったため，有効回答数は116名（男児61名，女児55名）であった。

3-1. 母親の養育態度の認知について

子どもの母親の養育態度の認知については，「そのとおり」を2点，「まあまあ」を1点，「ちがう」を0点として得点化し，最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果，解釈可能性から2因子を抽出した。因子負荷量

Table 1. 「養育態度尺度」因子分析結果

	因子	
	I	II
b_10 あなたの気持ちになって，向き合ってくれますか	.821	
b_8 あなたの話をじっくりと聞いてくれますか	.700	-.108
b_16 あなたが怖がっている時には，安心させてくれますか	.668	.179
b_14 あなたの心配事を分かってくれようとしめますか	.627	
b_6 少しの怪我でもとても心配して手当をしてくれますか	.584	
b_17 自分のことは我慢して，あなたのためにしてくれることがよくありますか	.557	-.156
b_4 あなたを立派な人にするために，どんなことでもしようとしめますか	.546	
b_7 あなたに相談せずに，いろいろなことを決めますか		.751
b_13 あなたとの約束を，よく忘れてたり聞いてくれなかつたりしますか	-.119	.554
b_15 同じことをしても，ある時は叱られある時は叱られないということがありますか		.520
	因子間相関	-0.211

が.50以上に満たないもの、第1因子、第2因子両方に高い因子負荷量を示したものを削除し、10項目を採択した (Table 1)。2因子の累積寄与率は42.01%であった。第1因子を「親密な母子関係」の因子 (7項目, $\alpha = .83$)、第2因子を「希薄な母子関係」の因子 (3項目, $\alpha = .63$) と命名した。また、項目内容の作成時には、「過保護」の因子として取り入れていた2つの項目が、作成時に「養育者の受容的な態度」として取り入れた項目とともに一つの因子に集約された。

3-2. 尺度の信頼性の検討

「自己開示尺度」「共感性尺度」「信頼性尺度」について、尺度の信頼性を調べるため、各尺度の内的一貫性を求めた。その結果、「自己開示尺度」は $\alpha = .80$ 、「共感性尺度」は $\alpha = .57$ 、「信頼性尺度」は $\alpha = .76$ であった。「共感性尺度」については高い内的一貫性を示しているとは言えないが、要因の関連を調べるために分析対象とする。

3-3. 尺度間の相関係数

養育態度尺度 (親密な関係, 希薄な関係), 自己開示尺度 (肯定場面, 否定場面), 共感性尺度, 信頼性尺度の平均と標準偏差をTable 2に示す。自己開示尺度においては、「よく話す」を2点, 「少し話す」を1点, 「話さない」を0

点として得点化した。信頼性尺度においては、養育態度尺度と同様に「そのとおり」を2点, 「まあまあ」を1点, 「ちがう」を0点として得点化した。共感性尺度においては、「受容を表した台詞」を2点, 「中立を表した台詞」を1点, 「拒否を表した台詞」を0点とした。全体として, 「親密な関係」「信頼性」「共感性」が高い得点を示し, 「希薄な関係」「自己開示」は低い得点を示している。

尺度間の相関係数を求めたものがTable 3である。「自己開示」と「親密な関係」の間には正の相関 ($r = .42, p < .01$) があり, 「自己開示」と「希薄な関係」については負の相関 ($r = -.24, p < .05$) がみられた。「親密な関係」と「信頼性」については, 正の相関 ($r = .73, p < .01$) がみられた。

Table 2. 尺度の得点の平均値と標準偏差

	全体 (N=116)		
	最大値	平均値	標準偏差
親密な関係	2	1.37	0.48
希薄な関係	2	0.64	0.55
共感性	2	1.25	0.46
信頼性	2	1.52	0.49
自己開示	2	0.95	0.42

Table 3. 尺度の得点間の相関関係

	全体 (N=116)				
	親密な関係	希薄な関係	共感性	信頼性	自己開示
親密な関係		-.16	.27**	.73***	.42***
希薄な関係			-.22*	-.02	-.24*
共感性				.19*	.25**
信頼性					.14
自己開示					

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

3-4. 自己開示への影響要因について

仮説のモデルを検証するため、Amosによるパス解析を行った。有意でないパスを削除し、再度分析を行い、適合度が最もよくなる時点まで分析を繰り返した。以下のAmosによる分析では同様の手順をふむ。その結果得られたパス・ダイアグラムをfigure 2に示す。モデルの適合度指標はGFI = .974, AGFI = .901, CFI = .854, RMSEA = .094であった。RMSEAの値がやや高いが、適合性が認められた。図のパスは5%水準で統計的に有意であった。「信頼性」から「自己開示」へ強い正の影響がみられた。「信頼性」から「自己開示」では負の影響がみられた。

3-5. 自己開示場面別の影響要因

上述の結果のとおり、「信頼性」から「自己

開示」への影響において、本研究での仮説と異なる結果となったため、「自己開示」を「肯定場面自己開示」($\alpha = .72$)と「否定場面自己開示」($\alpha = .65$)に分けて再度検討することとした。Amosによるパス解析を再度行い、その結果得られたパス・ダイアグラムをFigure 3に示す。モデルの適合度指標は、GFI = .954, AGFI = .878, CFI = .956, RMSEA = .094であった。RMSEAの値がやや高いが、適合性が認められた。図のパスは10%水準で統計的に有意であった。「共感性」から「肯定場面自己開示」への正の影響がみられた。「親密な関係」から「信頼性」, 「肯定場面自己開示」, 「否定場面自己開示」への正の影響がみられ、「信頼性」から「否定場面自己開示」への負の影響がみられた。

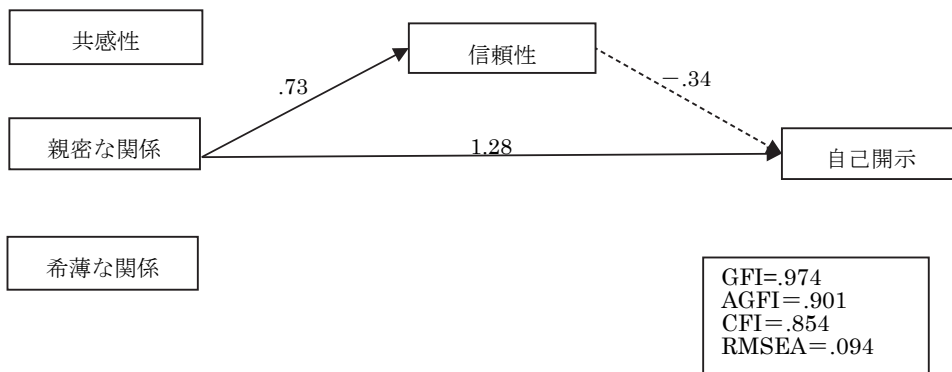


Figure 2. パス・ダイアグラム

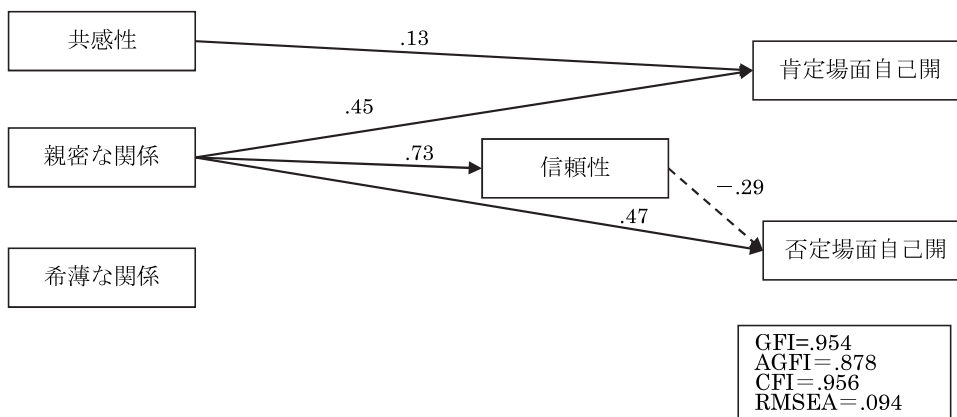


Figure 3. 自己開示場面別のパス・ダイアグラム

4. 考察

4-1. 母親の養育態度の認知について

養育態度尺度については、「受容的関わり」因子と「過保護・期待」因子、「拒否・厳格」因子の3つの因子を想定して作成したものだ。しかし、因子分析の結果、「受容的な関わり」因子と「過保護・期待」因子に含まれる項目が集約される結果が得られた。「受容的な関わり」因子と「過保護・期待」因子が集約された因子と、「拒否・厳格」因子の項目からなる因子の2因子で、母親が受容的且つ積極的に子に関わる「親密な関係の因子」と、拒否的で子への関わり方が消極的な「希薄な関係」の因子として抽出した。これは受容的な母親の態度と積極的に世話を焼く母親の態度が切り離せるものではないからだと考えられる。少子化が進む現代では、少ない子どもを大切に育てようと意識することから、親の子どもに対する過保護・過干渉の傾向が生じることが言われているが、一般的な母親像として、受容的で過保護な傾向があることも予想されるため、受容的な養育態度と問題のある養育態度としての過保護を区別できなかったことも考えられる。養育者の子育てへの価値観や、子どもとの関わり方も変化することは時代の移り変わりの中で自然に起こることであるため、養育態度がどのような因子で構成されるものであるのか今一度検討が望まれる。

4-2. 自己開示に影響する要因について

まず仮説1について検討する。「受容的関わり」因子と「過保護・期待」因子は、明確に分離することのできない特徴を持っていると考えられるため、仮説で記した“養育者が受容的であるという認知”は「親密な関係」の因子、“問題のある養育態度の認知”は「希薄な関係」と関連する因子と捉えることとする。仮説1:「養育者が受容的であるという認知は自己開示を促進し、問題のある養育態度の認知は自己開示を抑制するだろう。」については、「親密な関係」の因子は「自己開示」を促進するという結果となったため、部分的に支持された。このことから、精神的関わりがポジティブであればあるほ

ど、「自己開示」をより行うということが本研究では明らかとなった。

次に仮説2について検討する。仮説2:「養育者が受容的、共感的であるという認知は、養育者への信頼性を高め、信頼性が高いほど養育者への自己開示度は高い。」については、部分的に支持された。「親密な関係」は「信頼性」に影響し、「親密な関係」であればあるほど、母親への「信頼性」を促進すると言える。しかし、「信頼性」が「自己開示」を高めるという仮説は支持されず、むしろ「信頼性」が「自己開示」を抑制することが見出された。

本研究で「信頼性」が「自己開示」を抑制するという結果になったことは、まず「信頼性」を測るものとして使用した尺度による影響が考えられる。今回使用した尺度は、青年期の愛着関係における対人的信頼感を測定する尺度を改変したものであるため、子どもの母親に対しての信頼感を測る尺度としては充分ではなかった可能性がある。また、今回の「信頼性」尺度の項目や養育態度尺度との関係をふまえて考えると、信頼性尺度が母子の密着した関係を測るものと関連があることも予想され、「信頼性」という独立した要因として測ることに困難があったとも考えられる。

榎本(1989a)は、自己開示動機について研究しており、父や母に対する自己開示は「相談的自己開示」が中心であると述べている。さらに、後藤・廣岡(2005)の研究では、友人関係に関わる深刻な悩みを親に相談することに抵抗を感じる中学生が多いことを明らかにしており、中学生は親からの精神的自立や親に心配をかけたくない気持ちのために、親に話さないことが示唆されている。これらのことから、小学校高学年の時点でも母親への「信頼性」が高いとしても、自己開示は抑制されるということも考えられる。

また、酒井ら(2002)は、子が親に抱く信頼感が子どもの学校適応に影響を与えることを明らかにしている。特に男児において、小学校高学年は仲間集団での関わりを重要視し、親の価

値観とは一線を画す準拠枠を獲得している時期であるが、親への「信頼性」が高い子どもが家庭外の場面でより適応しているとするれば、様々な日常場面を自己の力や仲間集団の中で解決し、母親へ相談する必要がないことも考えられる。母親への「信頼性」が高いということが何か困った場面に対処する基本的な力を育むとすれば、「信頼性」が「自己開示」を抑制することも不自然ではないのかもしれない。

総合考察

本研究では、養育者の「養育態度」の認知、養育者の「共感性」の認知、養育者への「信頼性」が、養育者への「自己開示」とどのような因果関係を持つのかを明らかにすることを目的とし、調査した。その結果、母親がより子どもに親密な態度で接していると子どもが認知していることが、子の自己開示を促進するということが明らかになった。このことは、これまで自己開示と養育態度に関する研究の中で多数派であった、親の“温かい”“親切的な”“受容的な”といったポジティブな子との関わりが、子の自己開示を促進するという研究を裏付ける結果となった。子どもの自己開示を促進するためには、母親が子にポジティブな関わりを持つという態度が重要であると明らかになり、親子の関わりを考える上で重要な観点であるといえる。

また、「信頼性」との関連については、親の親密な養育態度が「信頼性」へ影響することが明らかになったが、「信頼性」から「自己開示」への明確な影響はみられなかった。「信頼性」が「自己開示」を抑制する結果が確認されたが、「信頼性」の尺度を作成し直す必要があることや、「自己開示」と「信頼性」との間には他の要因があることも推察され、さらなる検討が必要である。

また、本研究の課題として以下のことが挙げられる。まず、本研究では2校の小学校にアンケート協力を依頼したが、十分な回答数は得られていない。さらに広範囲、多人数で調査する必要があるだろう。また、本研究では自己や他

者を客観的に把握できる下限年齢として小学校5年生の児童を対象にしたが、年齢によってどのような変化がみられるのかを発達的にとらえることも重要であると考えられる。さらに本研究では母親と父親など複数の対象について比較することができなかった。小学校高学年の児童にとって、母親だけでなく、重要他者として父親が考えられ、父親の養育態度や父親への信頼性の意義も大きいと考えられる。今後複数の養育者について比較検討する必要があるだろう。次に尺度についてだが、本研究では「信頼性」の得点は高いほうに分布が偏っており、ばらつきがあまりみられなかった。児童期の子から養育者への「信頼性」を測る尺度は未だ十分に開発されておらず、親への対人的信頼感を測る尺度を再検討する必要があると思われる。また、「共感性」については、高い内的一貫性がみられなかった。このことが、共感性とその他の要因との関連があまりみられなかったことに影響していると考えられ、検討が必要である。

参考文献・引用文献

- ・Cozby, P. C (1973). Self-disclosure: A literature review. *Psychological Bulletin*, **79**, 73-91.
- ・Derlega, V. J., & Chaikin, A. L. (1975). Neuroticism and disclosure reciprocity. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **43**, 13-19.
- ・榎本博明 (1982a). 青年期における自己開示性 (1) 日本心理学会第46回大会発表論集, 299.
- ・榎本博明 (1989a). 自己開示動機に関する研究 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, **22**, 40-54.
- ・榎本博明 (1989b). 自己開示研究の展望 (1) - 自己開示と諸性格特性. 名城大学教職課程部紀要, **22**, 40-54.
- ・榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- ・榎本博明・林洋一 (1983). 中学生の生活意識 (Ⅱ) 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 76-77.
- ・池之上美嘉・藤崎真知代 (1995). 群馬大学教育学

- 部紀要 人文・社会科学編第44巻, 359-377.
- ・ 後藤安代・廣岡秀一 (2005). 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, **25**, 77-84.
 - ・ Jourard, S. M (1961). Age trends in self-disclosure. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior & Development*, **7**, 191-197.
 - ・ Jourard, S. M (1971a). Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self. New York; Wiley-Interscience.
 - ・ Jourard, S. M (1971b). The transparent self. New York; D.Van Nostrand.
 - ・ 角田豊 (1993). 共感性と母親から共感されるイメージとの関連—自己対象機能の観点からみた共感性と性差について 心理臨床学研究**10**, 76-81.
 - ・ 小口考司 (1991). 母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団に及ぼす効果 社会心理学研究第**6**巻第3号, 175-183.
 - ・ 久世敏雄・蔭山英順 (1974). 困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての—研究 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科**20**, 39-49, 1974-03-25.
 - ・ 松井三枝 (1985). 自己開示と精神健康の関係. 金沢大学臨床心理学研究室紀要**4**, 2-12, 1985-11-01.
 - ・ 松澤正子 (2011). 母親についての被共感イメージの検討—内的作業モデルと共感性との関連— 昭和女子大学生活心理研究所紀要**13**, 109-120.
 - ・ Pedersen, D. M. & Higbee, K. L (1969). Personality correlates of self-disclosure. *Journal of Social Psychology*, **78**, 81-89.
 - ・ Rivenbark, III, W. H (1971). Self-disclosure patterns among adolescents. *Psychological Reports*, **28**, 35-42.
 - ・ 相良順子 (2000). 児童期の性役割態度の発達—柔軟性の観点から— 教育心理学研究, 2000, **48**, 174-181.
 - ・ 酒井厚・菅原ますみ・眞築城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 2002, **50**, 12-12.
 - ・ 桜井純子 (1986). 青年の自己開示についての—研究 東京学芸大学1986年度修士論文
 - ・ 品川不二朗・品川孝子 (1958). 親子関係診断テストの手引き 日本文化科学社.
 - ・ 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告教育科学編, **34**, 139-152.
 - ・ 武田裕子・石田弓 (2013). 青年期における両親への相談行動について—利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて— 広島大学心理学研究, 第13号, 2013.
 - ・ 田中健史朗・梅本貴豊 (2013). 類似性が自己開示へ与える影響：類似面の差違に着目してカウンセリング研究2013, **46**, 197-206.